団一致度（GCR）はフラストレーション場面での常識的な適応を表わし，過多は24名と圧倒的に多く，これは常識的な適応をしすぎて，自己主張をおさえてしまう抑圧型とみられる。常識的な適応ができないとする過少はわずか1名だった。

重症度との差は，症例にかたよりがあったためか確かめられなかったが，3年間の結果を比較すると（図3），過多を認めた項目では，努力（i），容認（M）がやや増加し，集団一致度（GCR），責任回避（I），慣習服従（m），自責（I）が減少の傾向をみた。過少を認めた項目は依然として，障害強調（E′），直接攻撃（E），解決依存（e），外罰（E%），自己弁護（E+I）であり，大きな変動を認めなかった。

〔考　察〕

以上の2種類の検査を実施して，集団としての傾向と年次的変動について検討した。心理学用語と記載の方法には，まだまだ理解が困難であるが，気管支喘息児とその家族の心理的背景を知り，日常生活の指導に応用できると考える。すなわちこれらの検査には，親子関係テストのように作為的に記入されていたとしても，父母からみた喘息児との関係と同時に喘息児から父母をみたものと比較することにより，両者間のへだたりを発見したり，作為の可能性を知ることもできる。PF Study については，今後追跡調査する必要があると思われるが，記入している時点での健康状態心理状態に影響される部分があり，メサコリン吸入試験等による気道の過敏性検査に対し，心理的な過敏状態を反映するものではないかと推定される。

〔まとめ〕

喘息サマースクールに参加した延84名の喘息児について，田研式親子関係診断テストと Picture Frustration Study を施行し，全体的な心理的特徴と年次的変動について検討した。

〔参考文献〕

- 吉田勝美，他：ローゼンツアイク PF スタディ使用手引，三京房，京都，1963.
- 厚生省心身障害研究「小児気管支喘息」班：気管支喘息児の日常管理のための指針，1978年版，1979年版
- 赤坂　徹，他：喘息児夏季合宿（サマースクール）の再評価——心理的特徴と呼吸機能検査の応用——小児科臨床，34：105～115，1981.

小児気管支喘息における食餌アレルギーの臨床と予後

同愛記念病院小児科　馬　場　　実
向　山　徳　子
岩　崎　栄　作

アレルギー疾患の代表である気管支喘息においては吸入性抗原が重要な意義を持つことが多いが，小児期の気管支喘息，特に乳幼児では食餌性抗原の占める役割は重要である。小児における食餌アレルギーの特徴としては食餌性抗原による皮膚反応が陰性である場合が多く，診断的価値が低いこと，多種多様の症状を示し症状は年令により差がみられること，自然治癒（natural outgrow）がみられることなどである。今回われわれは気管支喘息小児において，その生活指導の一つとして，食餌アレルギーの関与する症例につき臨床的に検討を加え，また特異抗原の除去により臨床症状や血清 IgE 値，RAST 値などがどのように変化するか検討したので報告する。

対象は同愛記念病院小児科受診中の気管支喘息小児で食餌アレルギーを確認しえた100例（男児73例，女児27例）で男女比は 2.7：1，年令は 0～18才である。食餌アレルギーの診断は問診，食餌誘発試験，アレルギー皮膚試験，RAST 法にもとづき行った。

確認しえた食餌性抗原は卵61例，牛乳40例，そば10例，大豆8例，チョコレート2例，ピーナッツ2例，チーズ1例，茶1例，貝1例，エビ1例の計10種であった。複数食餌性抗原は26例にみられ，卵・牛乳アレルギーは14例（14%）にみられた。

食餌アレルギーの発症年令は0才で32.2%，1才で35.6%，2才で16.1%であり3才未満で全体の83.9%が発症していた。

臓器別の症状は0才では皮膚症状の発症が多く，1才

では呼吸器症状が増加し，8才前後にも呼吸器症状の発症が散見された。

アレルギー皮膚試験の結果は卵アレルギーでは33.4%，牛乳アレルギーでは6.3%の陽性率であった。RAST 値はそれぞれ32.0%，23.1%の陽性率で診断法としての信頼性は乏しいものと思われた。これらの症例を症状発現時間により分類して皮膚試験陽性率，RAST 値の陽性率をみると即時型反応群では皮膚試験陽性率は83.3%，RAST 値陽性率は80.0%を示しこれを IgE 関与型のアレルギー反応と考えるならば皮膚試験ならびに RAST 値の信頼性は高いものと考えられた。

卵白抗原の主要成分は Ovalbumin ならびに Ovomucoid にわけられるが卵アレルギーの症例につき Ovalbumin, Ovomucoid の特異 IgE 抗体，特異 IgG 抗体につき検索した。IgE 抗体は RAST 法を用い IgG 抗体は Protein A-Sepharose CL-4B を用いて測定した。

Ovalbumin について IgE 抗体については卵アレルギーの小児ではカウント数の高いものが多くみられた。即時型皮膚反応と IgE 抗体に関しては陽性群と陰性群の間に差はみられなかった。

Ovalbumin と IgG 抗体に関しては対照児では低値を示したのに対し，卵アレルギーの小児では高値を示したものが多くみられた。即時型皮膚反応に関しては陽性群と陰性群の間に差はみられなかった。

Ovomucoid については IgE 抗体に関して臨床症状ならびに皮膚反応の陰性のものはいずれも IgE 抗体は低値を示したのに対し，陽性のものに高値のものがみられた。

Ovomucoid の IgE 抗体に関しては卵アレルギーのないものは低値を示したのに対し，卵アレルギーの小児では高値を示すものが多くみられた。

食餌アレルギーの小児では原因抗原となる食餌の除去を指導している。除去後症状の軽快とともに血清 IgE 値，RAST 値がどのように変動するか観察した。除去後6カ月から1年経過し，卵アレルギー12例のうち2例が RAST score 3→2，4例が 2→1，2例が 1→0 と低下した。牛乳アレルギー8例については同様に除去後6カ月から1年して RAST score 2→0（4例），1→0（1例）と低下した。

血清 IgE 値についてはその変動には一定の傾向はみられなかった。

小児の気管支喘息の生活指導の指針として，食餌アレルギーの診断と予後について検討した。食餌アレルギーの診断はいまだ確立された手段に乏しいが，詳細な問診にもとづき注意深く除去，誘発試験を行う。アレルギー皮膚試験の陽性率は吸入性抗原のそれに比較して低率であるがより精製された抗原を用いることにより陽性率は高くなる。また特異 IgE 抗体を検出する方法としての RAST 法は症状が即時型におこるもの，即時型アレルギー皮膚反応が陽性のものには高率に陽性になるところから両者の相関をみながら検討するとよい。特異 IgG 抗体陽性を示すものも多くみられ，これは食餌アレルギーの機序としてⅢ型のアレルギーが関与している可能性もあると考えられ今後の検討を要するものである。

原因抗原物質の除去期間は RAST 値の変動からみると少なくとも6カ月から1年間は必要と思われる。その後の除去解除の時期に関しては個体の過敏性や抗原摂取量により異なるものと考えられきめこまかい生活指導が要求されるものと考える。

非ステロイド性抗炎症薬による薬物喘息の基礎的研究

星薬科大学薬理学教室　柳　浦　才　三

〔緒　言〕

薬物喘息を誘発する薬物としては，aspirin をはじめとする非ステロイド性抗炎症薬がよく知られている。しかし，これらの薬物喘息に関する基礎的研究は少ない。われわれは，すでにイヌを用いて薬物吸入下に気道抵抗を連続的に測定する方法を考案し，この方法により aspirin および indomethacin による気道抵抗の増大を観察した。

アスピリン喘息の発症機序については，種々の考察がみられる。なかでも，非ステロイド性抗炎症薬による prostaglandins 合成阻害作用がその一つとして挙げられている。そこで，今回はまず，prostaglandin E_2

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

アレルギー疾患の代表である気管支喘息においては吸入性抗原が重要な意義を持つことが多いが,小児期の気管支喘息,特に乳幼児では食餌性抗原の占める役割は重要である。小児における食餌アレルギーの特徴としては食餌性抗原による皮膚反応が陰性である場合が多く,診断的価値が低いこと,多種多様の症状を示し症状は年令により差がみられること,自然治癒(natural outgrow)がみられることなどである。今回われわれは気管支喘息小児において,その生活指導の一つとして,食餌アレルギーの関与する症例につき臨床的に検討を加え,また特異抗原の除去により臨床症状や血清IgE値,RAST値などがどのように変化するか検討したので報告する。